

 労協連だより

田嶋 康利

2月25～26日、労協連が主催する「全国よい仕事研究交流集会」を終えた翌週の3月4～5日、「全国若者・ひきこもり協同実践交流会 in 東京」に実行委員会の一員として参加する機会を得た。それぞれの集会の開催にあたって、「はたらく」こと、「生き続ける」ことの意味について考えさせられる2～3月であった。

全国よい仕事集会では「仕事一共に生き続けるために」をテーマに記念講演を行っていただいた関野吉晴さん(探検家、医師、人類学者、武蔵野美術大学教授。1993年から10年の歳月をかけて、アフリカに誕生した人類がユーラシア大陸を通過してアメリカ大陸にまで拡散していった約5万3千キロの行程を、自らの脚力と腕力だけをたよりに遡行する旅「グレートジャーニー」を行う)は、これまで25年間に32回、通算10年間以上にわたって、アマゾン川源流や中央アンデス、パタゴニア、アタカマ高地、ギアナ高地など、南米への旅を重ね、その人びとの暮らしの中から、「アマゾンの先住民には、魚を獲る、イモをつくるなどの行為を表す単語はあるが、仕事を意味する単語はない。完全に自給自足で、自分たちが食べられる分しか採らず、平等に分配する。暮らしには、自分たちでつくれるものしかなく、格差がない。仕事とは生き延びるために必要な、食べる、住む、着ることに伴う行動のことではないか」と、人間が生き続けること、働くことの本質的な意味につ

いて語られ、現代社会に生きる私たちがいかにその生存条件を他(資本)に委ねて支配されているのかを実感させられた。

また、3月の若者・ひきこもり協同実践大会の準備の中で出会った若者たちとの話合いを通して、いかに現代社会が生きづらい社会であるのか、学校や職場で差別、排除され、その結果ひきこもりの経験のある若者、不登校からオルタナティブな教育環境に身を置き、その後起業する若者たちなど、さまざまな経験を持つ若者たちと出会う機会を得た。「社会に役立つために」、「一人前」の人間として働いていないと社会の落伍者としての烙印を押されることに恐怖を感じている若者たちであった。生きづらさに抗していくと同時に、生きづらさを抱えたままでも生きていけるような社会づくりは果たして可能なのだろうか、と自ら問う契機となった。

今一度、人が働くこと、生きることの根源的な意味を問い直すこと、その根源に協同労働がどうアプローチできるのか。「人は生活する」という基本前提に立って、自らの生存基盤を、人と「共に」、自然と「共に」作り出していくことがいかに重要であるかを考えさせられる二つの集会であった。

私たち協同労働の協同組合・ワーカーズコープは、これまで30数年の歴史の中で、公園緑化や病院清掃、廃棄物処理や物流業務などの仕事を経て、介護や子育て、自立

就労支援などのケア、そして食や農、BDFなどの環境関連事業、給配食、農業、里山保全型林業、地域循環型の産業へとその事業の領域を広げてきた。これら多様な仕事は、あらためて考えみれば、人が生きていくための生存基盤を自らが取り戻していく(創り出していく)営みではなかつたらうか。これら「協同労働によるよい仕事」を地域化・社会化する(とりわけ、次世代に継承していく)ことを通して、人びとが地域で結びつき、「生き延びる」術を協同で身につけていくことができれば、「人をいのちにつなぐ」(天童荒太氏)ことが可能になるのではないか。

奪い尽くす経済、奪い尽くす社会は、人びとを分断し、若者や私たち現代人に生き

づらい社会を創り出してきた。SDGs(国連の持続可能な開発目標2030)が掲げているような持続可能で豊かな社会をつくることのできるとすれば、それは未来ある子どもたちが人間的に豊かに成長、発達していくことができる社会を展望することでしか見出せないのではないか。私たちワーカーズコープが全国で展開する児童館や学童、保育園、放課後等デイサービスなどに集う子どもたち、あらゆる子どもたちに、「学ぶ」「遊ぶ」にとどまらず、地域づくりの中心に位置付け「(協同してよい)仕事ができる子どもたち」に育っていくような「いのちの世話」(鷺田清一)を行うことが求められているのではないかと最近強く思っている。